

一般財団法人 黛民族舞踊文化財団



舞 踊 文 化
E. T. C

N O . 22

目 次

翁と三番叟 学習院大学名誉教授 諏訪 春雄 2

アジアの舞踊、おりふしの想い
～韓国舞踊「太平舞」と「扇の舞」～ 日本大学教授 丸茂 美恵子 4

「古代ギリシャの舞踊と
オリンピックの芸術観」 日本女子大学 国枝 たか子 7

自然人アイヌ こころの歌と踊り
第20回 「フンペ リムセ」 アイヌ文化伝承者 四宅 豊次郎 11

平成25年度黛民族舞踊文化財団活動予定 15

翁と三番叟

学習院大学名誉教授 諏訪 春雄

歌舞伎、文楽、能、民俗芸能など、日本の伝統芸能公演の冒頭に演じられる「翁」あるいは「式三番」の演目には白い仮面の翁と黒い仮面の三番叟が、ワキ役千載を伴って登場する。翁は白色尉、三番叟は黒色尉ともよばれる。

「翁」の源流は能にあり、歌舞伎以下の芸能の「翁」は能を受け継いだ。この「翁」を上演する意味は何か。

現行の能の「翁」は、黒白の尉のほかに千載を加えた三役で構成される。この三役は世阿弥のころに完成した演出で、それ以前は、児（露払）・翁面・三番猿楽・冠者・父尉の五役が登場していた。

児は幼児、冠者は元服して冠をつけた若者、父尉は老父である。黒白の老翁を別格の祖先とした家族であった。のちに児は千載つまり、千歳の老人の名に代わる。「翁」の芸は遠い昔の祖先が家族連れで登場して演じるのだ。

思い合わされるのは秋田のナマハゲに代表される年末年始の来訪神儀礼である。石川のアマミハギ、中国山陰のホトホトなど、私の調査では日本全国で四十をはるかに

超える例が知られる。通常は、青年たちが、藁で全身を覆い、鬼の面をかぶって、家々を訪れ、子どもたちに教訓をほどこし、餅をあたえて去る。

その正体は、土地によって、山の神、鬼、天狗などさまざまにいわれるが、総合して判断すると、季節の変わり目に子孫のもとへ訪れてくる祖先神である。

訪れてくる神々が家族であることを示すのが、比較的古形を保存している琉球列島の来訪神である。たとえば、アカマタ、パーントゥは親子であり、マユンガナシ、シヌグは夫婦



山形県遊佐のアマハゲ
子どもへ教訓



琉球列島石垣島のマユンガナシ
訪れる夫婦神

である。また、アンガマは老父母と子孫である。

沖縄に古形を伝え、本土を北上するほどその形がくずれ、山形、秋田、青森などでは鬼と考えられるようになった。この事実は、日本の来訪神の儀礼が沖縄にはやく伝来し、日本海沿いに北へ伝わったことを示している。

中国の長江流域の少数民族社会に源流と思われる来訪神の儀礼が保存されている。私は、全部で十三例を確認した。それらと比較すると、日本の来訪神の本質がよく分かる。

中国の場合でも、虎、蛙などに变化した例があるが、明らかに原型は家族の神々、それも民族の遠い祖先の神々である。湖南省の土家族のマオグースーで正月に出現する神々は、祖先の父母と子どもたちであり、貴州省イ族のツォタイジでは山林の神と高齢の先祖が出現する。

出現の目的も中国の例から明らかである。かつて子孫に教えた文化が正しく継承されているか、その確認に訪れるのである。そのために、来訪神は文化を子孫に教えた始原の時間を再現してみせる。ここから、日本の来訪神が決まって子どもたちに教訓をほどこす意味も判明する。

白と黒の組み合わせも、中国の陰陽の大極図にまで遡る観念である。白は天、陽、黒は地、陰を現し、統合されて、天地、陰陽、男女などを象徴する。そして五つの役柄は陰陽の働きの五行である。翁と三番叟は、人間に文化と技術を教えた祖先神であ



中国貴州省イ族のツォタイジ
すべて千歳以上の祖先神

るとともに、白と黒の対比と統合、五行の作用で、宇宙、天地、世界の根源をも象徴しているのである。

「翁」猿楽の起源は、これまで、研究者によって、寺社の祭礼における悪鬼払いの呪術芸（呪師芸）との関係だけが強調されてきた。しかし、なぜ、家族構成か、なぜ黑白の仮面の尉か、なぜ五か、という三つの問いを発すると、根源の時間にたちもどり、世界の秩序と人間の生命を更新する芸能の本質がはっきりと見えてくるのである。



中国チワン族自治区ミャオ族のマンコウ
子どもへ教訓

アジアの舞踊、おりふしの想い ～韓国舞踊「太平舞」と「扇の舞」～

日本大学教授 丸茂 美恵子

さてまた、今回は韓国の話に戻ろう。近代韓国伝統舞踊の父・韓成俊についてと、その娘・韓英淑（第27号僧舞第1代保有者）の弟子・李愛珠女史（第27号僧舞第2代保有者）については前々号で触れた。「僧舞」は僧侶の舞踊を芸術的な独舞として整えた代表的な民俗舞踊で、三大伝統舞踊の一つ。ほかに「サルプリ舞」と「太平舞」がある。

今回はその「太平舞」と人気舞踊の「扇の舞」について、その舞踊をそれぞれ正統に継承される梁性玉女史と金末愛女史との出会いを交えながら、私の想いを綴りたい。

両女史と正式に面会したのは、勤務先の日本大学の海外派遣でソウルに滞在した折に舞踊教育機関の視察を行った時だった。私と同年の梁性玉女史は慶熙大学出身で韓国芸術総合学校伝統芸術院教授、金末愛女史は慶熙大学校舞踊学部教授。どうもお二人は後輩・先輩の関係のようでもあった。

・民俗舞踊「太平舞」（テピョンム）の衣裳の型

韓国の巫女（ムーダン）の踊りには「ワンコリ（王の舞）」や「テガム（大監ノリ）」というものがあり、その「ワンコリ」を韓成俊が形式的に古典に忠実になるように直したものが「太平舞」である。華麗な衣裳で身を包み、複雑な拍子が流れるにつれ、腕は静かに上げつつも足が多様な動作を操り、裾を翻しながら踊る姿。その秘めたるものの奥にスペイン舞踊の持つ情熱と一脈相通ずるものを感じさせる舞でもある。

この舞踊は韓英淑（写真1）、そして姜善泳（写真2）に受け継がれて1988年重要無形文化財第92号太平舞に指定された。梁性玉女史（写真3）は重要無形文化財第92号太平舞伝修助教の認定を受けている。



写真1 韓英淑の「太平舞」



写真3 梁性玉の「太平舞」



写真2 姜善泳の「太平舞」

ここに「太平舞」の衣裳についての興味深い写真が5葉ある。写真1は百済の宮廷衣裳、写真2, 3は新羅の宮廷衣裳だという。韓成俊はワンコリを「朝鮮の王が踊られたとして出来た昔の踊り」と定義し、新羅時代の処容伝説や祭政一致時代の司祭が王だった当時の王たちが踊っていた記録と関連づけている。ということで、新羅の宮廷衣裳を着るのが本来のようだが、日帝時代はそれを着るのが許されず、百済の宮廷衣裳に替えて踊ったのだと誰に教わったか忘れてしまったが、以前聞いたことがある。

韓国は他民族の侵入による荒廃のみならず、王朝の興亡が繰り返されてきた。その中で日本の古代文化に大きな恩恵をもたらしてくれたのが百済である。百済の都・扶余（泗沘）に流れる白馬江（錦江）を舟に乗って川下りをしたことがある。川の流れは悠久の昔から変わらず、この川から人や物が運ばれ、池造り・鍛冶・機織り・酒造りの技術も『千字文』や『論語』などの漢学も日本へと渡ってきたのだろう。それら百済の文化は香り高く、人々は戦いというものは好まず、東の間の平和な日々を白馬江に舟を並べて宴を開き、鼓や琴の楽器を奏で歌い舞ったという。その絶壁に「落花巖」と名付けられた名所があるが、それは唐と新羅の連合軍に負け、王宮に仕えていた大勢の女官が身を投じて百済と共に散っていった場所である。この戦いでは倭国の援兵が百済の再起をかけて戦ったことから、日本と百済の絆の強さが知られよう。「太平舞」の衣裳の二つの型には、このような古代の日韓の交流史を背景にした関係が隠されているのだろう、と私は勝手に推測している。

ところが……、である。

ORCNANA プロジェクト主催の日韓シンポジウムで公開した梁性玉先生の教え子による「太平舞」では、はじめ新羅の衣裳で出て、途中百済の衣裳に変わるものだった（写真4, 5）。私は今も書いてきたように「太平舞」の二つの衣裳のことを聞いていたので、この演出に現代の息吹を感じたのだった。



写真4
「太平舞」朴知恵（ORCNANA 日韓シンポジウム）



写真5

・創作舞踊「扇の舞」（ブッチェチュム）の源流と創造

「扇の舞」と言えば、まだ私が若い頃、リトルエンジェルスが来日公演した舞台の話題をおぼろげに覚えている。羽根で縁取られた扇を両手に持ち、端正な顔立ちの少女たちが微笑んだ花の輪のような形…。それ以来、「扇の舞」は古典美を大衆的に表現した、代表的な韓国舞踊として日本人の私たちに印象づけたに違いない。

韓国に行った時、「扇の舞」は伝統舞踊ではないのですよ、と教えられたことがある。巫女の舞踊の中で扇を持って踊る舞を応用した、現代の創作舞踊である。金白峰（崔承喜の義妹）が、1954年に独舞の「扇の舞」を初演し、1968年のメキシコオリンピックの際に群舞に構成し直し、大勢の人が踊るようになったもの。これは崔承喜の「巫女舞」を見て、そこから創作されたという。

海外研修以前のことになるが、ソウルのホテルで行われた「扇の舞」の講習会（15頁左上）を見学し、慶熙大学名誉教授でもある金白峰先生と会食させていただき、いろいろなお話を伺う機会に恵まれたことは幸運であった。

半年ほど後に本学の海外研修では韓国の各舞踊教育機関の視察を実施したが、本学と正式な交流校の慶熙大学芸術学部にある舞踊科で初めて金末愛先生とお会いした（写真6）。その際、舞踊学部を立ち上げる準備をしていると話されていたが、数年前に ORCNANA プロジェクトで招聘した時にはすでに舞踊学部の所属となっていた。日本には“舞踊学科”さえ皆無の状況であるのに、韓国では舞踊学科は50以上もあり、実に羨ましい限りだ。しかしながら、慶熙大学の舞踊は韓国舞踊が非常に強いのが特徴であるという点では、40数年の歴史を誇る、本学芸術学部演劇学科日舞コースとの共通性を持っている。

さて、「扇の舞」は金白峰先生の代表的なレパートリーであるので、それを永遠のものとして残していくのが慶熙大学舞踊学部の課題であるという。そして、「扇の舞」の



写真6
筆者と金末愛教授
(慶熙大学に於て)



写真7
「扇の舞」崔賢珠
(ORCNANA 日韓シンポジウム)

源流のものも保存しつつ発展させていく。つまり、師匠から教えてもらったこの舞を弟子として守って、それにかつ自分なりの独創性を加えて、少しずつ変化させていきたい、と金末愛先生は語る（15頁右下）。日韓シンポジウムでは金末愛先生の教え子によって「扇の舞」が優美に披露された（写真7）。

2009年1月、芸術学部で開催した ORCNANA 日韓シンポジウム「舞踊の教育システム」へお二人をお招きし、〈韓国芸術総合学校伝統芸術院の舞踊教育—「太平舞」の伝習—〉、〈慶熙大学校舞踊学部の舞踊教育—「扇の舞」の再構成—〉というテーマでレクチャーデモンストレーションを公開した。シンポジウムの要旨と韓国舞踊の動画は ORCNANA のホームページ (<http://www.orc-nana.jp>) の「NANA の活動」から入り、「公開講座・シンポジウム・フォーラム」「韓国舞踊紹介」をご参照いただきたい。また日韓シンポジウム時の写真は『民族舞踊文化』No.21 の6頁に掲載されている。

古代ギリシャの舞踊とオリンピックの芸術観

比較舞踊学会副会長 国枝 たか子

一般的な日本人は、オリンピックはスポーツ大会でありスポーツだけの祭典と思い込んでいるようだが、古代ギリシャ、近代オリンピックでは、総合的なコンペティション（およびコンクール）で芸術分野を含んでいた。ギリシャの歴史研究者たちにとっては常識ともいえる解釈だが、日本のメディアからそれが読み取れないのは残念だ。古代ギリシャは西欧文明の源流である。古代ギリシャ人はソクラテスをはじめとして一般市民に至るまで芸術を人生から軽んじることはなかった。とくに音楽、演劇、舞踊は詩の創作と朗読とともに重要な存在であった。



ヘラ神殿

1、西欧王族たちの古代ギリシャへの郷愁、回帰

19世紀になると西欧では古代ギリシャへの郷愁、心の回帰が強くなった。キリスト教社会の中心人物である絶対王政の流れをくむ王様や貴族たちのサロンでは、ギリシャ神話や古代ギリシャ遺跡の発掘に関する話題と人気が高まった。

実際のところ、ギリシャのご本家でもザッパスという人が「オリンピック競技会」を再現しようと王様に進言した。ザッパスは情熱的な人で、莫大な財産をオリンピック復活にかけた。ザッパスとその親族の粘り強い働きかけによって復活版「オリンピック競技会」が全ギリシャから選手を集めて開催された。もちろん芸術競技も復活版で含まれている。創作叙事詩による演劇コンクールや音楽のコンサートなどである。この時代は万国博覧会も盛んだったので、世界各国から集められた美術品、工芸品、近代技術の表現である銃なども展示されたようだ。演劇の中では、詩の朗読やダンス、合唱などが行われた。ちなみに後にクーベルタン男爵による第1回近代オリンピックの招待状が日本政府に届けられた時に、日本からは選手団を派遣せず、日本製の新式銃を出品して「参加」としたのである。

2、クーベルタンによるオリンピックの再興

英国やフランス貴族たちもそれぞれの地域で、オリンピックの復興を試みはじめた。

英国は特に熱心だった。フランスではクーベルタン男爵がスウェーデン王室、ギリシャ王室、英国王室ほかを説得して第1回の近代オリンピック大会を実現した。クーベルタンはザッパスのギリシャ版「オリンピック競技会」や英国の古代オリンピックの再興の試みを吸収する智慧を持っていた。少年時代に詰込み式の勉強に苦労した坊ちゃん育ちのクーベルタンは、中学高校にあたる男子の中等教育にも体育・スポーツ教育を導入しようと政権に働きかけたが、保守的なフランス本国では受け入れられなかった。途中で挫折することしばしば……。外交によって各国のスポーツ組織を束ねることにより「近代オリンピック」1896年アテネ大会を開催することに成功した。このような経緯をもって、パリのソルボンヌ大学において国際オリンピック委員会は船出した。これが現在の国際オリンピック委員会に続いている。

3、ギリシャ神話と考古学博物館

古代ギリシャには古代ギリシャ人の宗教があった。ギリシャ神話はゼウス（男神）やヘラ（女神）、アポロ（男神）やダイアナ（女神）などを信仰する多神教のお話である。どの神も興奮すると踊ったり歌ったりする。スポーツの勝敗はどの神が味方につくのかで決まると考えられた時代もあったようだ。魅惑的な人間たちは、神々の怒りや祝福や嫉妬により翻弄される。たとえば最も美しい青年であるオリオンが、アポロの嫉妬による策謀にかかり、アポロの姉ダイアナに殺されてしまう。そこがギリシャ神話のドラマチックな魅力を創り出してきた。



ニジンスキーのバレエで有名な絵

では古代ギリシャではどのような舞踊が踊られていたのでしょうか。様々な発掘された壺絵から詳しい情報が入手できる。アテネの中心部にある国立考古学博物館をお勧めするが、ここにはおびただしい数の古代の壺が保管されている。もっとも圧倒されるのは豪族の葬式の図柄であろう。大規模な葬式が行われたと考えられる。歌や演劇や舞踊やスポーツも行われた様子。葬祭競技とも呼ばれている。そういう貴重な壺がたくさん展示されている。紙面が限られているので、その一部を紹介する。引用、参考資料には上記のギリシャ国立考古学博物館の関連文献とローウラー著「古代ギリシャの舞踊文化」を使用した。

4、武装した男たちの古代葬式ダンス

古代ギリシャ遺跡は数千年という長い間、土の下に埋もれていたが、19世紀のドイ

ツ人考古学者、ハインリッヒ・シュリーマンの冒険から始まった発掘によって近代文明の光に照らされることになった。シュリーマンなくしては、ミケーネおよびトロイの古代遺跡発掘の成功はなかったであろう。両遺跡から出た王の黄金のマスクほかの財宝は伝説となり、アテネにある国立考古学博物館の正面展示室に現在も飾られている。

最近では1960年代になると、かつて解読できなかった古代ギリシャ文字の新たな解読方法が確立された。アガメンノン王で知られるペロポネソス半島の都市国家「ミケーネ」の人々はギリシャ神話や詩の中だけに出てくる想像上のものではなく、「初期ギリシャ人」であり、クレタやミノスを征服して占領したことが歴史的事実として明らかになった。

クレタ島と古代都市国家ミケーネが文化的に接続しており、そこで踊られていた古式舞踊は紀元前13世紀から12世紀のものとして記録されている。武装した兵士たちが、戦死した仲間を火葬する炎の周りで跳びあがったり、円形行列の隊形で、取り囲みながら激しく踊って、死者の中に、再び生命のエネルギーを吹き込むダンスである。叙事詩「イーリアス」の第23章にも記されている情景である。のちには兵士の武装ダンスだけでなく、戦車競走も含まれてパフォーマンスが構成された。さらに泣き男が加わり、胸を叩いて悲しみを表現し、悲歌と挽歌を絶唱しながら葬式行列を行った。肉体的に活発な動きを連続して、武器を振り回し、悪霊を追い払ったという。

5、婚礼舞踊—古代国家ミケーネとクレタ島、デロス島—

武装した男たちの古式舞踊が中心にある一方で、若い娘と若者がともに踊る婚礼舞踊もある。花嫁の行列がやってくると、処女たちが着飾って回り、跳び、大地を踏み鳴らして踊り歌ったといわれている。若者たちは大きな音を立てながら、豎笛を吹いたり、豎琴をかき鳴らしたりした。また楽器を弾きながら踊り騒いでクルクルまわったり、足を踏み鳴らしたり、集団のダンスを行ったりした。また、巧みな足さばきで軽快に回転を連続し、大勢の見物人がそれを囲んで楽しんだ。クレタ文化がミケーネ人たちに伝えられていたことを示すものとしては、婚礼舞踊における軽業師の登場がある。群衆の中央にプロフェッショナルな軽業師（曲芸師）が進み出て、靈感を受けながら速度をつけてクルクルと回り、さらに楽師たちの笛や歌声が響きわたって洗練された演技が披露された。紀元前8世紀のアテネの酒つ



古代ギリシャの都市国家、
ミケーネの遺跡

ばには、ダンス・コンクール（競技会）の賞品として使用されていたことを示す文字が記されている。「すべての踊り手の中で、最も活発に踊った者にこれを授与する」

デロス島の神殿ではしばしばダンス・コンクールが開催された。賞品としては、金の大皿、銀の大皿、花輪、木の枝、香油が授与された。これらの事柄は優勝者の名前や指導したダンス教師の名前とともに、碑文に古代文字で記録されている。デロス島は古代ギリシャ遺跡の中でも最も重要な地域の一つとして評価されている。

このように近代考古学の発掘調査を基礎にした地道な世界各国の研究者たちの取り組みが進められてきた。彼らの研究成果によって、近代になってから、数千年も地下に埋もれていたギリシャ遺跡の謎が、次々に解かれてきた。科学的調査は、20世紀になると歴史研究（とくにギリシャ史の解釈学）がめざましく進むことによって絵の読解や古代文字の解読がさらに可能になり、古代ギリシャの舞踊の謎も徐々に明らかになりつつある。

6、デルフィの神域と劇場ダンス

古代ギリシャでは神殿と劇場と競技場が一つのまとまりをもっていた。オリンピアやアテネより古い時代のものとされている「デルフィ古代遺跡」では葬儀が神殿（日本の寺院にあたる）で荘厳に行われたあとに、捧げ物である牛や羊を屠った肉（ビーフステーキに似た料理）を食べる会合があり、その後、険しい山道を登って円形劇場に到着する。劇場では詩の朗詠、歌、器楽、ダンス、演劇などのパフォーマンスによって故人の生前の履歴や人柄が表現される。参列者は故人を偲んで涙を流す。さらに若い男性たち、相続の候補者となる青年たちは山道を登っていく。糸杉とオリーブの樹々の険しい道を過ぎると、高い場所に競技場が忽然と現れる。そこでスポーツ競技が開催された。優勝者は後継者として認められ、親戚一同に祝福されて財産を相続した。このように古代ギリシャでは、舞踊、音楽、演劇、スポーツが儀式の重要な一部として位置づけられていた。

（初出文献、本文の一部は世界舞踊祭編「世界のダンス」2012年3月より）

= 自然人 アイヌ = こころの歌と踊り

第20回 「フンペ リムセ」(鯨踊り)

アイヌ文化伝承者 四宅 豊次郎



パシクルの浜辺、中央の流木が鯨で
カラスが群れ舞っている

地球上で現存する動物の中で、一番巨大なものは鯨である。

アイヌ語で鯨はフンペといい、北海道各地のコタン(集落)には、数多くの物語や歌舞が伝えられている。

古来から日本近海には各種の鯨が生棲して、わが街の釧路市にも数十年以前までは捕鯨基地があり、大くの漁獲量を揚げていた。

近年は世界的な保護活動により捕鯨は禁止されて、現在では道東沖と東北沖で水産省の許可を得て、生態調査のため頭数を

限定して交互に試験操業をしている。

鯨は巨体で悠悠と大海原を回遊しているから海の王者かと思われるのだが、アイヌの考えではそうではなく、海の王はレブン・カムイ(沖の神)といい、鯨(シャチ)である。

鯨の天敵はこの鯨で、鯨が四・五頭組んで互いに信号を発しながら鯨を狙撃すると、逃げ場がなくなり止むなく海岸に打揚がることもあった。

鯨一頭が陸に上がると、昔から七浦の村々を潤すと言われ貴重な食料(肉や油)を得ることになる。

鯨が追い込んできた鯨は、大きな食料貯蔵庫を運んできたようなもので、村人達はレブancamイの贈り物に心から感謝して、「沖の神」の名も一層高まることになる。

鯨が海岸に寄り揚がるのには、これ以外にも冬場は流水に囲まれて脱出することができなくなり、そのまま流水と共に接岸することもある。

鯨肉は焼いたり、煮たり、また塩漬けにしたり燻製にして保存食とした。

脂肪分は食用油やラッチャク(灯火)として用い、大量なので容器に詰め保存蓄えた。

骨は各種の細工物に活用したのである。

フンペ リムセ (鯨 踊り)

クァーク クァーク ワック アク ワック アク
kuak kuak wakku aku wakku aku
(鴉の啼き声)

(上記をくり返して歌う)

タンタ ピシタ フンペ ヤンナ
tanda pisita hunpe yanna
(この(場所)(砂浜に)(鯨が)(陸に上がった)
クァーク クァーク ワック アク ワック アク

(くり返す)

※ (注) ポン サラニプ マキリ ポン ルイ
pon saranip makiri pon ruy
(小さな)(編み袋と)(小刀)(小さな)(砥石(といし)を持って)
クァーク クァーク ワック アク ワック アク

(くり返す)

モッケウ ケ ピセイ ケ
mokew ke pisei ke
(首肉を)(とろう)(腹肉を)(とろう)

以上の歌をくり返し、それに合せて踊る。

「鯨踊り」の物語は、朝早く海岸の方でカラスの啼き声が頻(しき)りにするので、目覚めのいいフチ(老婆)が行って見ると渚に大きな鯨が寄り上っていた。

老婆は「これはレプンカムイ(沖の神・シャチ)が贈ってくれたものに違いない」と思い、遙か海の彼方に向かってオンカミ(拝礼)すると、すぐさまコタン(集落)に引き返して、この事を皆んなに告げた。

そして、コタンの女性達を集めて鯨の肉や油を取りに行くことになった。

実際クジラが海辺に揚った時には、村の若い男衆が我れ先にと各おの道具を携さえ



四宅 ヤエ

て、駆けつけ解体作業をするのだろうが、この「鯨踊り」の場合あまり男性は登場しない。

歌や踊りにして楽しむからであろう。

歌舞のはじまりは、腰の曲った老婆が杖をついて先頭に立ち、その後にメノコ（女性）たちが十数名、それぞれ編み袋や小刀、砥石を持ってつづき、鯨のいる砂浜へと向かう。

そこには鯨役となる女性が横たわっている。

鯨は巨大だから、この役の女性は体格のいい太った人物が選ばれる。

一行は鯨に近づくとその周囲をひと廻りしてから、うやうやしく拝礼してから解体作業に入ります。

作業をしていると数羽のカラスが鯨の肉を取ろうと頭上を飛び交い近づくので、メノコ達は払い除けながら時どき肉切れを放り投げて与える。

人間よりも先に寄りクジラを発見したのはカラス達であるから、分け前をもらうのは当然とばかり必至である。

この場面のカラス達とメノコの肉のやり取りは、というより奪い合いは滑稽であり面白い。

鯨の図体は脂肪分が多いので、身を切り取っていると刃物はすぐ切れなくなるので、その時は砥石を出して刃を研ぐ。

やがて十分な肉や油身を切り取ったところで、鯨に対し皆んで“イヤイライケレ”（有難うございました）と拝礼する。

鯨の切り肉をいっぱい詰め込んだ編み袋は、ブドウ蔓（つる）などの丈夫な樹皮で作っているものもあるので、この場合は籠（かご）といった方が解りやすい。

籠の取手は長目に付けてあり中央部を巾広くしてあり、そこを額に当てて背負う。

そして、踊りの御仕舞はまた来た時と同じ順序でコタンへ帰って行く。

もちろんフンペ・リムセは歌と踊りなので、鯨肉は布で工夫して作り、マキリ（小刀）は竹光を使用している。

アイヌ文化など世間一般に理解されなく、評価もされなかった時代、故郷・白糠（シラヌカ）に伝わる「鯨踊り」は、それを大切に伝承してきた母ヤエにとっては深い思い入れがあった。漁業の盛んなコタンに生れ育ったという環境も大いに作用している。もしヤエが伝えていなければ、この舞踊はなくなっていたかも知れない。

だからヤエは仲間達を誘って集まり、アイヌ舞踊をおこなう場では必ずこの「鯨踊り」を入れて、一緒に歌い踊って楽しそうに振舞っていた。

昔は白糠の海岸や、やや離れた場所に幾度か鯨が寄り上がり、自分も実際見たり母と一緒に鯨肉を取りに行った事もある。

一番はじめは昭和19年2月に流水と共にやって来た。町の中心街から東に一里程のところに刺牛（サシウシ）という漁師部落がある。

私の生まれた実家から500メートルの海辺にマッコウ鯨が上ったのである。

部落の人々は今まで見たこともない鯨の巨大さに驚き、歓声をあげて喜こんだ。

その時、自分は6歳になったばかりだったので解体作業には参加できないので、母だけが行き鯨肉を持ってきた。

太平洋戦争の最中だったので、父や兄は軍属として徴用されて家にいなかったのも、母一人の働きで生活していた。

食肉など手に入るのは困難な時代だったので、母は大いに助かったと語っていた。

次は昭和23年に街の西側を流れる茶路（チャロ）川の近くにナガス鯨が一頭。

三度目は四里ほど西にある馬主来（パシクル）沼の海辺に上ったが、僕は中学生で学校があり行けなかった。母と兄が二日間も通って多量の鯨肉を持って帰った記憶があるけど、種類は不明。

パシクルはアイヌ語で鴉のことだが、アイヌの伝説に由来して付けられた地名である。（このパシクル伝説については、また後に記すことにします）

この海岸には昔から度たび鯨が寄り上ったと伝えられているので、現在は「鯨踊り発祥の地」として、国道沿いに鯨の像が建っている。

※（注）「鯨踊り」の歌の中で、鯨肉を取りに行くときポン（小さな）サラニブ（編み袋）を持ってとあるが、普通であれば大きな籠を用意して、より多くの肉を入れるところだが、アイヌの精神では共同で行くのだから、欲張って大きな籠を持つのではなく、謙虚な気持で後に来る人々のためにも・・・との、優しい意志が心底にある。



左端がヤエ



(左上)「扇の舞」
講習会には全国各地から門弟が集まる
(右下)金末愛の「太平舞」
(写真提供:丸茂氏)

平成25年度黛民族舞踊文化財団活動予定

平成25年

5月7日(火) (一般財団法人) 黛民族舞踊文化財団総会
4月30日～5月7日 「ワールド・ハーベスト・フェスティバル」に参加のため
マレーシアに黛民族舞踊団渡航

7月12、13、14日 群馬県太田市新田文化会館エアリスホールにて日本・マレーシア・
インドがアジア民族舞踊交流会開催

平成26年 3月24日(土) 世界舞踊祭(国立劇場)公演に黛民族舞踊団参加

研究報告誌出版予定 舞踊文化 E. T. C. No.22発行
民族舞踊文化 No.25発行

舞踊文化 E. T. C. No.22

発行人 加戸 守行

平成25年5月7日発行

港区赤坂 3-10-3

編集人 黛民族舞踊文化財団事務局

一般財団法人 黛民族舞踊文化財団

電話 03-3583-3633

FAX 03-3583-3639